

邪馬台国論争における日本列島の認識問題

2022 年 1 月 10 日

我部山 民樹

1. 初めに

女王・卑弥呼（242～248 年に死去）と女王国の都である邪馬台国に関する史料は魏志倭人伝によるが、史料そのものに間違いがあるとして、それに曲解やこじつけをし過ぎて、論争に收拾がつかなくなっているのではないかと邪馬台国が移動した可能性はかならずしも否定できないので、魏志倭人伝に書かれている**魏の使者が訪れた邪馬台国**を調べることにした。

主にルートの方角や工程の整合性、途中に立ち寄った国々がどこかを議論しているようである。

日本列島の地理に関してほぼ正確な知識を有する江戸時代の学者（新井白石、本居宣長ら）や正確な知識のある現代人はそれをベースに議論している。

また、魏志倭人伝の作者・陳寿は紀元前後、中には縄文時代末期頃からの伝承や報告書を織り交ぜて作成したと思われるので、その情報は魏の使者の報告とは区別して検討すべきと思われる。

2～3 世紀頃の古地図は見つかっていないことが分った。果たして魏の使者や倭人伝の作成者・陳寿は日本列島の地理に関し、どのような知見を有していたのだろうか。調べてみると日本も中国も中世（15 世紀頃）の地図しか現存していないようである。（7 世紀頃の僧・行基が作ったとされる行基図といわれるものがあるらしいが、それは残ってなくて、現存する行基図と言われているものはいつ、誰が描いたものかは不明のようである。）

羅針盤も無く（羅針盤は 11 世紀、中国の沈括の『夢溪筆談』にその記述が現れるのが最初だとされる）、測量技術も乏しかった時代だ。使者はどのような倭国の地理認識で訪問したのだろうか？魏志倭人伝の編者・陳寿はどのような地理認識で記述したのだろうか？

まず、主な出来事の年表をまとめる。

○年表

年度	主な出来事
紀元前後	この頃、倭国は百余国に分立
57 年	倭奴国王が後漢に使いを贈り、光武帝より「漢委奴国王」

	の金印を受けとる。（志賀島出土金印）
107 年	倭国王が後漢に使いを送り、生口 1 6 0 人を献上する
180 年頃	この頃、倭国大いに乱れる（倭国大乱）。女王国の都・邪馬台国に住む女王・卑弥呼を立てて王とする。
239 年	卑弥呼、魏に使いを送り「親魏倭王」の号を受け取る。金印を授与される。
～249 年	卑弥呼逝去
250 年頃	卑弥呼の宗女（嫡出（正統の血縁）である娘）の壺与が 13 歳で女王となる
266 年	壺与が帯方郡に使者を送る。
3 世紀後半（～297 年）	西晋王朝の吏官・陳寿が魏志倭人伝を成立

○魏志倭人伝（ぎしわじんでん）

正しくは「三国志」魏書東夷伝倭人条（ぎしよとういでんわじんじょう）。
 編者・陳寿は晋王朝の吏官で、「三国志」は 3 世紀後半の成立とされる。

「倭人は帯方（ソウル近辺）の東南大海の中にあり、山島に依（よ）りて
 国邑（こくゆう）をなす」で始まり、邪馬台国への経路が登場する。（魏
 志倭人伝の現代語訳は最後にある添付資料 3. 参照）

○邪馬台国

2 世紀～3 世紀に日本列島に存在したとされる国（くに）のひとつ。邪馬台国
 は倭女王・卑弥呼の宮室があった女王国であり、約 30 の国からなる倭国連合
 （邪馬台国連合）の都があったとされている。

○邪馬台国論争

邪馬台国論争は、江戸時代の新井白石や本居宣長らに始まり、候補地は四
 国や山陰、北陸、東北説、ジャワ島説まで 100 カ所を超える。有力視され
 るのが吉野ヶ里遺跡（よしのがりいせき）を候補地とする九州説と、纏向
 遺跡（まきむくいせき）を候補地とする畿内説だ。その所在地については
 21 世紀に入っても議論が続いている。



吉野ヶ里遺跡復元建物（佐賀県神埼郡吉野ヶ里町）
住人 5,700 ほどといわれる。



纏向遺跡（まきむく、奈良県桜井市）



復元模型



240m² の建物は卑弥呼の宮室か？

纏向遺跡のイメージ図



全国各地の土器が発掘されている。

○帯方郡から邪馬台国への道のり



帯方郡から邪馬台国までの距離（魏志倭人伝）



後漢時代の1里は
約400mとする

○問題は距離と方角

魏（中国）から朝鮮半島の「狗邪（くや）韓国」を経て、海を渡って「対馬（つしま）国」「一支（いき）国」へ。さらに北部九州の「末盧（まつら）国」「伊都（いと）国」「奴（な）国」「不弥（ふみ）国」までの小国の推定地と行程については現地名との対照などで九州説も畿内説も、ほぼ一致するところ。問題はその後の「投馬（つま）国」までの「南水行 20 日」、さらに「邪馬台国」までの「南水行 10 日」「陸行 1 月」の行程だ。従来、この通りに南へ進むとはるか南海の洋上に位置することになる。距離が誤りならば九州のどこかにあり、方角の「南」が「東」の間違いなら畿内にたどり着くと言われている。

2. 検討

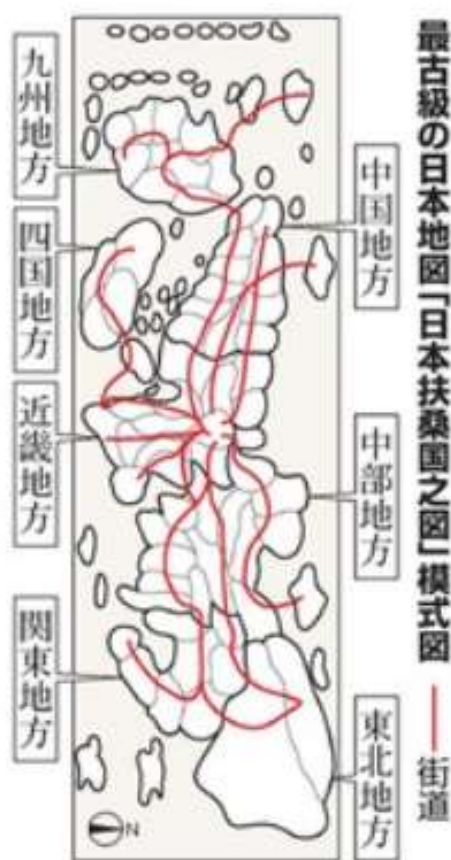
魏志倭人伝に間違いがないとは言えないが、間違っているとの前提で、都合の良いように仮説を唱えて読み替えてしまうと際限なく諸説が出現してくる。中には自説の主張の為のこじつけも見受けられる。

まずは記述が正しいとの前提で、検討すべきであろう。

(1) 方角

南と言うのは、正確な地理を認識している江戸時代以降の学者や我々現代人が認識している地理を前提にして魏志倭人伝を読み解くのは危険である。当時の人々の日本列島の地理概念を確認すべきである。15～16 世紀の日本の史料（資料 1）、中国の地図（史料 2）に基づいた地図では、大陸に最も近いのは九州で、列島は南北に広がっている。さらに中国の地図では、列島は魏の東側ではなく南に位置している。日本の列島認識が中国側に伝わり、それを前提にした地図かもしれない。いずれにしても 3 世紀頃の人々が現代人とほぼ同じような日本列島の地理認識をしていて、中世頃の人々が、（資料 2.）『龍谷図』のような認識に変わったということは考えられない。3 世紀の人々も中世の人々と同じような地理認識だったのだろう。従い、日本海沿岸を移動することは東ではなく、南に移動するとの認識だったのだろう。中国の人々は日本海沿岸の集落と交易して、列島沿岸や隠岐の島等の日本海の島に関する知見を有していたと思われるし、瀬戸内海は地図にも描いていないので、恐らくその存在を知らなかったし、利用することも無かったと思われる。瀬戸内海を移動したとは考えられない。何れにしても現代人からすると東を南と方角を間違えたことになってしまう。間違っていたのは日本列島の形そのものの認識であって、魏志倭人伝の記述は間違っていなかった。彼らの地理概念に基づいて、倭人伝を読み解かなければ、真実に近づけないだろう。

資料 1 日本扶桑国之図（14 世紀中頃）



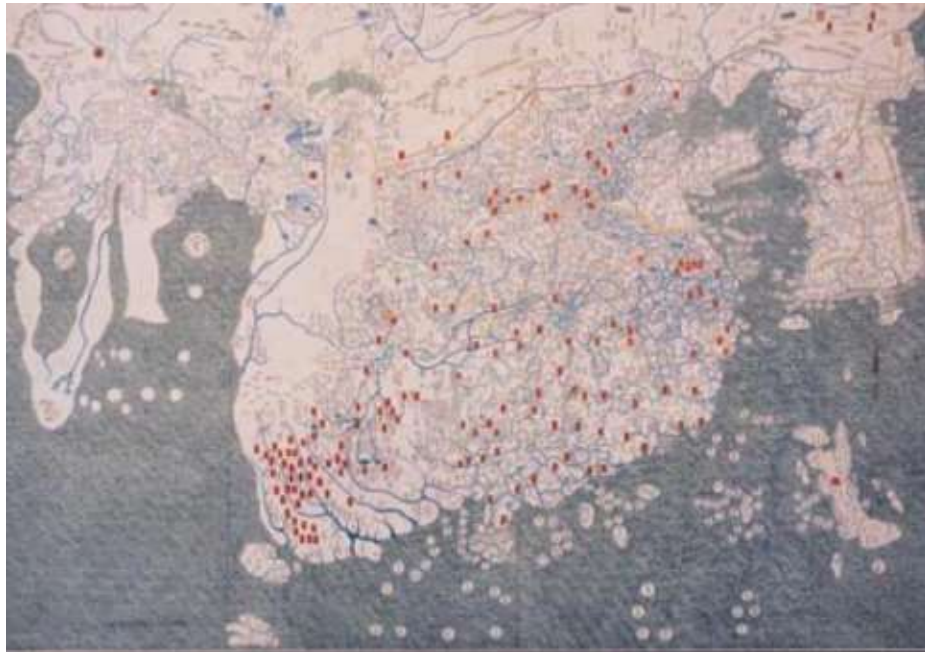
14 世紀中ごろの室町時代（南北朝時代）に描かれたとみられる、本州から九州のほぼ全域が記された日本地図がみつかった。広島県福山市の県立歴史博物館が発表した。現存する最古の日本地図は京都・仁和寺（にんなじ）所蔵の「日本図」（1305 年）とされるが、西日本が欠けており、全体が残った地図では最古級。日本地図の変遷をたどるうえで重要な発見と注目される。

資料 2. 『混一疆理歴代国都之図(こんいつきょうり・れきだい・こくとのず)』
(15 世紀初頭)

本稿では省略して『龍谷図』と呼ぶ。この地図が作成されたのは意外に新しく、西暦 1402 年に中国から持ち帰った地図を基にして朝鮮で作成されたという。まず目を引くのは異様に大きい朝鮮半島だが、それ以上に日本列島の配置

だ。日本は九州を北にして、本来位置よりも 90 度南に傾いた南北の列島として描かれている。

実際の日本列島は魏（洛陽）の東に位置するが、この図では会稽（長江下流域）の東で、魏の南方向に描かれている。



『龍谷図』から地名を読み取り、図示化して見やすくした図。



刺馬

老岐島

隠岐島

この地理を前提に置くと、邪馬台国への道のりは次のようになる。

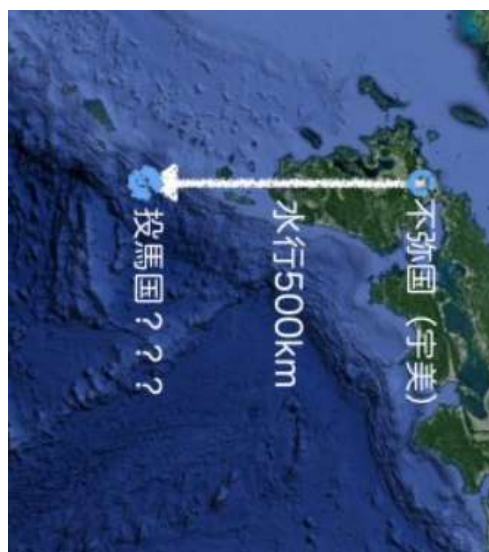


↑ 北

- ・畿内説は邪馬台国が南側になり、記述に合致する。南側は本州がある。
- ・南に下ったことを正にして実際に東側になる畿内説を否定し、九州説を主張しているが、九州内であれば距離的に陸地を突き抜けてしまうという問題があるが記述の間違いと曲解して説明しているが、使者たちの認識していた方角が異なれば、九州説は元々あり得ないことになる。

↖ 北

西 🖱️



(2) 距離及び工程について

邪馬台国の記述もあり、使者は邪馬台国を訪問し、自分の目でみて、自分の判断で書いているはずであり、倭国の人からの聞き語りではない。

距離に誇張があるにしても概ねルートは正しいとの前提で検討する。

投馬国は邪馬台国に次いで、人口の多い集落である。後の出雲国が投馬国だろう。

(3) 上陸場所

古代山陰道推定ルート図を参照。



投馬国以降の記述が簡単なのは、上陸した場所がそれほど大きくはない集落だったのだろう。上陸した場所について記述は無いが、邪馬台国に向かう山陰道に近い船着き場のある集落と想定する。但馬国が候補地となる。

【古事記研究で知られる三浦佑之氏（千葉大学名誉教授）は、その著書『海の民』の日本神話 古代ヤポネシア表通りをゆく』（新潮選書）の中で、日本海側ルートこそ、多くの伝承で使われた「表通り」であったと三浦氏は語る。そうした事例として、古事記の「卑弥呼の時代から 100～150 年ほど後、4 世紀

末頃と思われるが、15 代応神天皇の時代に、新羅国の王子を名乗る人物が渡来して、但馬（たじま）の地に住み着いた話」を紹介している。**但馬や敦賀といった日本海側は、渡来系の人々が訪れ、交易を行い、そこに住み着いた人々も多かったことを示しているといっているだろうし、日本海側にはそうした諸外国の使節を受け入れる迎賓館や、船の整備港などもあった。】**

奴国と投馬国（出雲王国）の直線距離はおおよそ 300 キロで水行 20 日となる。出雲国と但馬国の直線距離はおおよそ 150 キロであり、水行 10 日となる。距離と工程（日数）の比がほぼバランスする。

(3) 畿内説の距離に関する整理

国名	到達までの工程	候補地	実際の距離
狗邪（くや）韓国	帯方郡から水行 7,000 余里（× 0.4 k m=2800Km	伽耶、任那（み まな）	
対海国を対馬（つ しま）国と読み替 える、1,000 余戸	水行 1,000 余里	対馬	
一大国を一支（い き）国と読み替え る 戸数 3,000 許	水行 1,000 余里 （×0.4=400 k m	壱岐島	136 k m （約 3 倍）
末盧（まつら） 国、4,000 余戸	水行 1,000 余里 （400 k m）	肥前国松浦郡唐 津 （現・佐賀県唐 津市）	47.5 k m （9 倍）
伊都（いと）国、 1,000 余戸	東南陸行 500 余 里（200 k m）	筑前国志摩郡 （現・福岡県糸 島市）	36.5 k m （6 倍）
奴（な）国、 20,000 余戸	東南 100 里（40 k m）	春日市	27.5 k m （2 倍）
不弥国（ふみこ く）	東行 100 里	福岡県穂波郡 又は糟屋郡宇美 町	
投馬（つま）国、 50,000 戸	南水行 20 日	出雲市？	直線距離約 300 k m
邪馬台国	・水行 10 日	纏向遺跡等の大 和	・直線距離約 150 k m
70,000 余戸	・陸行一月		・直線距離約

(4) 九州説

伊都国から奴国までは同じである。

国名	工程	候補地	実際の距離
投馬（つま）国、 50,000 戸	水行 20 日	邪馬台国九州説で は日向国都萬（つ ま、都萬神周辺、 現西都市妻地区） 説、薩摩国説	不明
邪馬台国 70,000 余戸	・水行 10 日 ・陸行一月	・吉野ヶ里遺跡 （佐賀県） ・熊本	不明

距離の単位が異なるのは、伊都国辺りまでは多くの使者や交易者が訪問していて、従来のデータを魏の使者が使用し、その後の邪馬台国行きのルートは自分たちが初めてであり、データが無いので、水行と陸行は自分たちの所要日数を記載したのであろう。通過した地名にも馴染みがなかったのかもしれない。

水行ルート及び工程に関しては全く、合致していない。記述を無視している。それに当時の日本列島の地理認識を考慮すると全く合致しない。

例えば‘一月を1日の間違い’としてしまうと記述全体の信頼性を失くしてしまう。他にもこじつけが際限なく可能になってしまう。

(5) 倭国の地理的位置

当時の魏では倭国は魏の東ではなく、南に位置すると認識している。

そして、日本列島は九州の末盧国から南に広がっていると認識している。

従い、舟で移動したときには南下していると思い込んだのだろう。仮に天体を見て気が付いていたにしても、方角は当時の中国における日本列島の認識によるもので、皇帝への報告は皇帝の理解する地理で南下したことにするはずである。

明時代（1368～1644 年）の地図であるが、2～3 世紀もほぼ同様の認識だったと思われる。位置は実際より南方であり、九州から南南東に向かって広がっている。

(6) 上陸地

移動を容易にするために出来るだけ水行し、大和への古代道路にアプローチできることが前提であろう。

出雲国との交流は頻繁だっただろうし、古代山陰道は比較的に整っていただろう。アプローチを考慮すると但馬国辺りだろう。

○水行速度

古代の船の移動力は 1 日辺り 10～30 k mとの資料がある。土佐日記では潮待ちをするので平均して 1 日 7 k mであった。(350 k mを 50 日)

奴国から投馬国（出雲として）間は、実際のルートは直線距離の 2 割増しとすれば、1 日平均 $1.2 \times 300 \text{ k m} / 20 = 18 \text{ k m}$ であり、想定範囲内と言える。

投馬国～但馬国間

1. $2 \times 150 \text{ k m} / 10 = 18 \text{ k m}$ も想定範囲内と言える。

(7) 陸行速度

江戸時代の参勤交代はおよそ 32～40 k m/日で健脚だった。道路が整備されていて、江戸屋敷もあったので身軽だったと思われる。

この速度なら、 $2 \times 150 / 32 = 10$ 日となる。その 3 倍であり、かかり過ぎていることは否めないが、起伏が激しく、現代よりは整備の不十分な古道を重い荷物を背負った場合、あるいは荷車で運んだ場合についての歩行速度の知見は持たない。悪天候であれば、雨宿りもしただろうし、饗応もあって長逗留したことも考慮すれば一月の可能性は十分にある。

(8) 古代中国における距離の単位「里」

次の通り時代ごとに微妙に異なる。

- ・西周：358.20m
- ・東周：415.80
- ・秦：415.80m
- ・漢：415.80m
- ・魏呉蜀三国時代：459.00m
- ・晋：459.00m
- ・隋：459.00m

・唐：443.70m

ここでは約400mとする。

(9) 人口について

当時、日本の人口は百数十万人と言われる。

一戸当たりの人口の史料は無いが、3～5人と想定する。

○人口のまとめ

	国名	戸数	人口（人）
1	対馬国	1,000	3,000～5,000
2	壱岐島	3,000	9,000～15,000
3	末盧国	4,000	12,000～20,000
4	伊都国	1,000	3,000～5,000
5	奴国	20,000	60,000～100,000
6	不弥国	？	
小計	1～6 計	(29,000)	(84,000～145,000)
7	投馬国	50,000	150,000～250,000
8	邪馬台国	70,000	210,000～210,000
小計	7, 8 計	(120,000)	(360,000～460,000)
合計	1～8 計		510,000～670,000

邪馬台国が九州にあったとすると、九州の人口に510,000～670,000人となる。当時百数十万人と言われているので、九州だけで500,000～600,000人は多すぎる。やはり邪馬台国は畿内にあったと思われる。

倭国側のデータの信頼性を疑問視する方もおられるようだが、税の徴収のこともあり、信頼性は案外高いと思われる。

3. さいごに

邪馬台国が畿内にあることに疑問の余地がない。

(1) 結論の前提

① 魏志倭人伝

西晋の陳寿により 3 世紀末（280 年（呉の滅亡）～297 年（死没）の間）に書かれたものであり、女王国の都である邪馬台国への使者の報告も含めて、複数の人々の時代を超えた報告をまとめたものと思われる。中には縄文後期頃からの語り継がれた話も含まれているかもしれない。その中には信じがたい話も無きにしもあらずだが、そのことを理由に邪馬台国に関する記述を曲解することは避けるべきである。

魏志倭人伝には過去のあやふや（？と思われる）な伝承も混在していると思われるが、それを以て邪馬台国に関しての記述に信頼性を欠くということではないので、陳寿が使者の報告書に基づいて記述したと思われるので、それを正にして邪馬台国論争をすべきである。

② 方角

当時の人々の方角認識で、魏志倭人伝を読み解くべきであり、中世の『龍谷図』の存在からして、2～3 世紀の人々も日本列島は南北に連なっていると考えていたはずである。この時期の人々が、我々と同じような日本列島を認識していて、中世には龍谷図のような認識に変わったはずは無い。それをベースに魏志倭人伝を作成したことに、疑問の余地は無い。邪馬台国の以北を女王国としている。列島が南北との認識であろう。

③ 女王国より海を渡って東側の侏儒国（しゅじゅこく）の候補

不明だが、中国の人々は古代より日本海沿岸には何度も訪れていて、この辺りの地理や人々の慣習に知見があったことは間違いなからう。女王国の東千余里の国は隠岐島や佐渡島にも度々訪れていただろう。距離を考慮すると隠岐島か。

(2) 畿内説の検討結果

項目	検討結果	備考
邪馬台国の方角	彼らの認識する方角の南は妥当	現在の九州説は西方向になり、合致しない

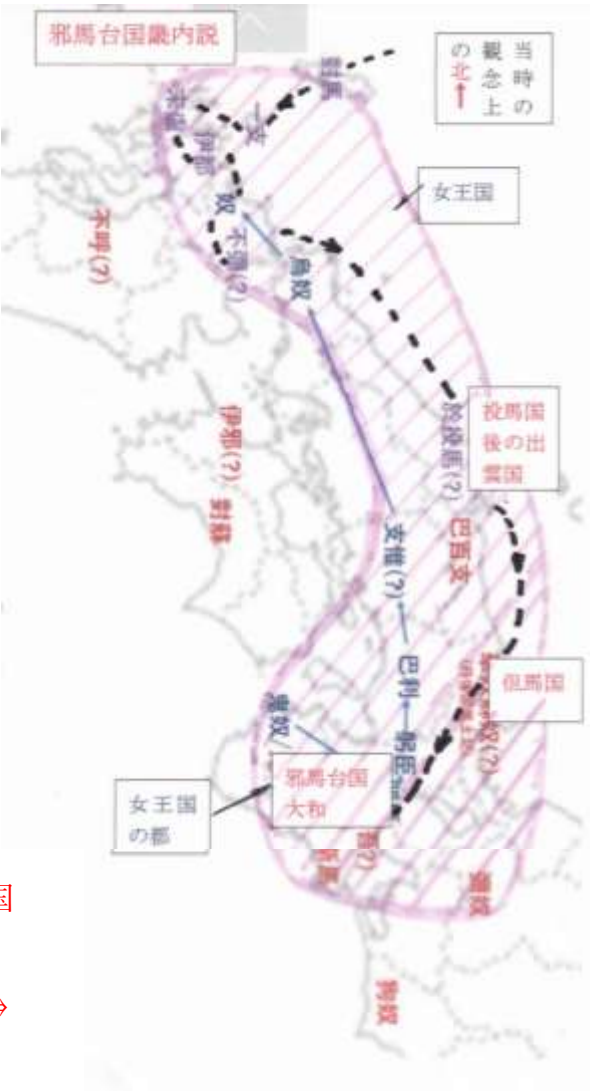
不弥国までの距離	の長さが今一つ不明だが、400m とすると不弥国での距離は合わないが、測量の問題や誇張もあるだろう。	い。
邪馬台国までの水行速度	想定内であろう。	
邪馬台国までの陸行速度	天候、饗応も考慮すれば、想定内と言える。	九州説では海上に出てしまう。
女王国（邪馬台国ではない）の南にあるって女王	伊勢であれば、候補になり得る。	
国に属さない狗奴国		
女王国の東の倭種の国で	不明。隠岐の島は島根半島から	九州説として
海を渡り、千里の距離に	約 50 k m の位置にある。距離は	四国は南であり、東は本州である。方角が異なる。候補の島は全く不明である。
ある侏儒(しゅじゅ)国	ほぼ合致する。	
宮室・楼観・城柵を設ける	纏向遺跡は候補となり得る	
親魏倭王の金印紫綬	卑弥呼を倭国の王と認めている。地方の有力豪族ではない。	
女王国より以北には、特に一大率(いちだいそつ)	以北と言うのは山陰、九州の西	九州に邪馬台国があれば、比較的近い伊都国に一大率を置くことはないだろう。
を置き、諸国を檢察せし、常に伊都国に治す。	日本の国々のことであり、方角は合致する。	吉野ヶ里とすれば、直接檢察出来るので伊都国に一大率は不要なはず。
	九州の王族が、九州から東征し、大和に至り、遠隔地の九州の国々を統治するために伊都国に一大率を置き、檢察させたとなれば、理解し易い。	
卑弥呼が魏より銅鏡 100 枚を賜る	出土した三角縁神獣鏡は決め手にならないか？	
卑弥呼の死後、大きな墓が作られた	箸墓古墳は 240～260 年築造と想定されている。	

伊勢



(3) 畿内説のルート図

一大率（伊都国内）



水行 20 日

隠岐島

水行 10 日

陸行一月

邪馬台国の以北が女王国

狗奴国⇒

魏の使者が訪れた女王国の都・邪馬台国は畿内である。しかし、九州の王族がいわゆる東征をして、畿内の邪馬台国に至り、そこを女王国の都と定めたことは否めないし、十分にあり得るだろう。その東征の途上、吉野ケ里から中国地方の吉備や出雲に連合王国の都を移しながら、畿内にたどり着いたのかもしれない。

日本列島を南北に広がっていると認識した場合、邪馬台国の以北は女王国（西日本を征服）で、伊都国に一大率を置いて、諸国を檢察している。以南（近畿、関東は未征服）は女王国ではなく、女王国の南にある狗奴国と争っていたとすれば、妙に真実味が湧いてきて、納得できる。

その他の資料（諸説あり！邪馬台国ミステリー他）

纏向等畿内説	吉野ケ里等九州説
卑弥呼が呪術に使用したと云われる卑弥呼の時代のものと特定された桃の種 2800 個が発掘された。	
卑弥呼が魏に丹（水銀用）を貢いだと魏志倭人伝にある。この時代に丹が採れたのは大和地方のみとされ、近辺に採掘跡がある。大和に邪馬台国があったと想定できる。	
纏向遺跡の大型建物は 240m 3 であり、倭人伝に記載されている卑弥呼の宮室を彷彿させる。	
全国各地の土器が発掘された。都のようである。	
径百余歩（150m）の大きな墓が作られたと魏志倭人伝にある箸墓古墳は土器の測定により 240 年～260 年に築造されたものとの結果が出ていて、卑弥呼の時期が合致している。	
	絹織物が発掘された。
	高さ 12m の物見やぐら
	魏志倭人伝に記載の宮室・楼観の建物と城柵（堀を掘り、盛り土して柵をこしらえる）の構造がある。
	倭人伝に民衆の前に姿を現さなかったとあるが
	多くの鉄製品が出土した。他を圧倒

	する鉄製の矢尻等の武器を使って倭国大乱を終息させた。
	硯等の発掘で文字を使用していたことが分り、高度の文明があった。
	伊都国に卑弥呼の墓かもしれない平原古墳がある。勾玉他の女性の装飾品が発掘された。
	平原『ひらばる』古墳から銅鏡 40 枚が発掘された。46.5 c m の国宝・内行花文鏡 5 枚が含まれる。その他は 13.5 c m の画文帯神獣鏡である。卑弥呼がもらった銅鏡の候補ではある。
畿内で多くの三角縁神獣鏡が発掘されている。最近、洛陽で同じ図柄の銅鏡が発掘された。卑弥呼がもらった銅鏡の候補ではある。	



三角縁三神三獣鏡（三仏三獣鏡） 奈良県広陵町・新山古墳出土
宮内庁蔵（東京国立博物館展示）

画文帯神獣鏡



平原遺跡・1号墓



変形内行花文八葉鏡（複製）

伊都国歴史博物館展示。

箸墓古墳（奈良県桜井市箸中）



墳丘全景（右に前方部、左に後円部）

資料 3. 魏志倭人伝（現代語訳）

以下、引用する。

【倭人(わじん)は帯方(たいほう)の東南大海の中に在り、山島に依(よ)りて国邑(こくゆう)を為(な)す。旧(もと)百余国。漢の時朝見(ちょうけん)する者有り。今、使訳(しやく)通ずる所三十国。

郡より倭に至るには、海岸に循(したが)って水行し、韓(かん)国を歴(へ)て、乍(あるい)は南し乍(あるい)は東し、其の北岸狗邪韓(くやかん)国に到(いた)る七千余里。始めて一海を度(わた)る千余里、対馬(つしま)国に至る。其の大官を卑狗(ひこ)と曰(い)ひ、副を卑奴母離(ひなもり)と曰ふ。居る所絶島、方四百余里可(ばかり)。土地は山陰(けわ)しく、深林多く、道路は禽鹿(きんろく)の径(みち)の如(ごと)し。千余戸有り。良田無く、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴(してき)す。又(また)南一海を渡る千余里、名づけて瀚海(かんかい)と曰ふ。一大〔一支(いき)〕国に至る。官を亦(また)卑狗と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。方三百里可(ばかり)。竹木・叢林(そうりん)多く、三千許(ばかり)の家有り。差々(やや)田地有り、田を耕せども猶(なお)食するに足らず、亦南北に市糴す。

又一海を渡る千余里、末盧(まつろ)国に至る。四千余戸有り。山海に浜(そ)ひて居る。草木茂盛(もせい)し、行くに前人(ぜんじん)を見ず。好んで魚鰔(ぎょふく)を捕へ、水深浅と無く、皆沈没して之(これ)を取る。東南陸行五百里にして、伊都(いと)国に到る。官を爾支(にき)と曰ひ、副を泄謨觚(せもこ)・柄渠觚(へくこ)と曰ふ。千余戸有り。世々(よよ)王有るも、皆女王国に統属す。郡使(ぐんし)の往来常に駐(とど)まる所なり。東南奴(な)国に至る百里。官を兕馬觚(しまこ)と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。二万余戸有り。東行不

弥(ふみ)国に至る百里。官を多模(たも)と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。千余家有り。

南、投馬(とうま)国に至る水行二十日。官を弥弥(みみ)と曰ひ、副を弥弥那利(みみなり)と曰ふ。五万余戸可り。南、邪馬壹(やまい)〔台(たい)〕国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月。官に伊支馬(いきま)有り、次を弥馬升(みましょう)と曰ひ、次を弥馬獲支(みまかくき)と曰ひ、次を奴佳鞮(なかにてい)と曰ふ。七万余戸可り。女王国より以北、其の戸数道里は略載す可(べ)きも、其の余の旁国(ぼうこく)は遠絶にして得て詳(つまびら)かにす可からず。

次に斯馬(しま)国有り、次に巳百支(しおき)国有り、次に伊邪(いや)国有り、次に都支(とき)国有り、次に弥奴(みな)国有り、次に好古都(こうこと)国有り、次に不呼(ふこ)国有り、次に姐奴(そな)国有り、次に対蘇(つそ)国有り、次に蘇奴(そな)国有り、次に呼邑(こお)国有り、次に華奴蘇奴(かなそな)国有り、次に鬼(き)国有り、次に為吾(いご)国有り、次に鬼奴(きな)国有り、次に邪馬(やま)国有り、次に躬臣(くし)国有り、次に巴利(はり)国有り、次に支惟(きい)国有り、次に烏奴(うな)国有り、次に奴(な)国有り。此(こ)れ女王の境界の尽くる所なり。

其の南に狗奴(くな)国有り、男子を王と為す。其の官に狗古智卑狗(くこちひこ)有り。女王に属せず。郡より女王国に至る萬二千余里。

男子は大小と無く、皆黥面文身(げいめんぶんしん)す。古(いにしえ)より以来、其の使、中国に詣(いた)るや、皆自ら大夫(たいふ)と称す。夏后(かこう)の小康(しょうこう)の子、会稽(かいけい)に封ぜられ、断髪文身(だんぱつぶんしん)、以(もつ)て蛟竜(こうりゅう)の害を避く。今、倭の水人(すいじん)、好んで沈没して魚蛤(ぎょこう)を捕へ、文身し亦以て大魚・水禽(すいきん)を厭(はら)ふ。後(のち)稍(やや)以て飾(かざり)と為す。諸国の文身各々異り、或(あるい)は左に、或は右に、或は大に、或は小に、尊卑差有り。其の道里を計るに、当(まさ)に会稽の東冶(とうや)の東に在るべし。

其の風俗淫(いん)ならず。男子は皆露紒(ろかい)し、木髻(もくめん)を以て頭に招(か)け、其の衣は横幅(おうふく)、但々(ただ)結束して相連ね、略々(ほぼ)縫ふこと無し。婦人は被髪屈紒(ひはつくつかい)し、衣を作ること単被(たんび)の如く、其の中央を穿(うが)ち、頭を貫きて之を衣(き)る。禾稻(かとう)・紵麻(ちょま)を種(う)え、蚕桑緝績(さんそうしゅうせき)し、細紵(さいちょ)・縑緜(けんめん)を出(い)だす。其の地には牛・馬・虎(とら)・豹(ひょう)・羊・鵲(かささぎ)無し。兵には矛(ほこ)・楯(たて)・木弓を用ふ。木弓は下を短く上を長くし、竹箭(ちくせん)或は鉄鏃(てつぞく)、或は骨鏃なり。有無(うむ)する所、儋耳(たんじ)・朱崖(しゅがい)と同じ。

倭の地は温暖、冬夏生菜を食す。皆徒跣(とせん)。屋室有り、父母兄弟、臥

息(がそく)処(ところ)を異にす。朱丹(しゅたん)を以て其の身体に塗る、中国の粉(ふん)を用ふるが如きなり。食飲には籩豆(へんとう)を用ひ手食す。其の死には棺(かん)有るも槨(かく)無く、土を封じて冢(ちょう)を作る。始め死するや停喪(ていそう)十余日、時に当りて肉を食はず、喪主(そうしゅ)哭泣(こくきゅう)し、他人就て歌舞飲酒す。已(すで)に葬(ほうむ)れば、举家(きょか)水中に詣(いた)りて澡浴(そうよく)し、以て練沐(れんもく)の如くす。其の行来・渡海、中国に詣るには、恒(つね)に一人をして頭を梳(くしけず)らず、蟣蝨(きしつ)を去らず、衣服垢汚(こうお)、肉を食さず、婦人を近づけず、喪人(そうじん)の如くせしむ。之を名づけて持衰(じさい)と為す。若(も)し行く者吉善(きちぜん)なれば、共に其の生口(せいこう)・財物を顧(こ)し、若し疾病有り、暴害に遭へば、便(すなわ)ち之を殺さんと欲す。其の持衰謹(つつし)まずと謂(い)へばなり。

真珠・青玉を出だす。其の山には丹有り。其の木には^榎(だん)・杼(ちょ)・予樟(よししょう)・榲(じゅう)・櫪(れき)・投(とう)・櫪(きょう)・烏号(うごう)・楓香(ふうこう)有り。其の竹には篠(しょう)・簞(かん)・桃支(とうし)。薑(きょう)・橘(きつ)・椒(しょう)・蘘荷(じょうか)有るも、以て滋味と為すを知らず。獼猴(めんえん)・黒雉(こくち)有り。

其の俗、举事行来に、云為(うんい)する所有れば、輒(すなわ)ち骨を灼(や)きて卜(ぼく)し、以て吉凶を占ひ、先づ卜する所を告ぐ。其の辞(じ)は令龜(れいき)の法の如く、火坼(かたく)を視(み)て兆を占ふ。

其の会同・坐起(ざき)には、父子男女別無し。人性酒を嗜(たしな)む。大人(たいじん)の敬(けい)する所を見れば、但々(ただ)手を搏(う)ち以て跪拜(きはい)に当つ。其の人寿考(じゅこう)、或は百年、或は八・九十年。其の俗、国の大人は皆四・五婦、下戸(げこ)も或は二・三婦。婦人淫(いん)せず、妬忌(とき)せず、盜竊(とうせつ)せず、諍訟(そうしょう)少なし。其の法を犯すや、輕き者は其の妻子を没し、重き者は其の門戸(もんこ)及び宗族(そうぞく)を滅す。尊卑各々差序有り、相臣服(あいしんぷく)するに足る。租賦(そふ)を収む、邸閣(ていかく)有り、国国市有り。有無を交易し、大倭(たいわ)をして之を監(かん)せしむ。

女王国より以北には、特に一大率(いちだいそつ)を置き、諸国を檢察せしむ。諸国之を畏懼(いたん)す。常に伊都国に治(ち)す。国中に於(お)いて刺史(しし)の如き有り。王、使を遣して京都(けいと)・帶方郡・諸韓国に詣(いた)り、及び郡の倭国に使用するや、皆津(つ)に臨(のぞ)みて搜露(そうろ)し、文書・賜遺(しい)の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯(ささく)するを得ず。

下戸、大人と道路に相逢(あいあ)へば、逡巡(しゅんじゅん)して草に入り、辞を伝へ事を説くには、或は蹲(うずくま)り或は跪(ひざまず)き、両手は地に

匄(よ)り、之が恭敬(きょうけい)を為す。対応の声を噫(ああ)と曰ふ、比するに然諾(ぜんだく)の如し。

其の国、本亦男子を以て王と為し、住(とど)まること七・八十年。倭国乱れ、相攻伐(あいこうばつ)すること歴年、乃(すなわ)ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼(ひみこ)と曰ふ。鬼道(きどう)に事(つか)へ、能(よ)く衆を惑はす。年已(すで)に長大なるも、夫婿(ふせい)無く、男弟有り、佐(たす)けて国を治む。王と為りしより以来、見る有る者の少なく、婢(ひ)千人を以て自ら侍(じ)せしむ。唯(ただ)、男子一人有り、飲食を給し、辞を伝へ居処に出入す。宮室・楼觀・城柵、巖(おごそ)かに設け、常に人有り、兵を持して守衛す。

女王国の東、海を渡る千余里、復(ま)た国有り、皆倭種なり。又侏儒(しゅじゅ)国有り、其の南に在り、人の長(たけ)三・四尺、女王を去る四千余里。又裸(ら)国・黒齒(こくし)国有り、復た其の東南に在り。船行一年にして至る可し。倭の地を参問(さんもん)するに、海中洲島(しゅうとう)の上に絶在し、或は絶へ或は連なり、周旋(しゅうせん)五千余里可りなり。

景初(けいしゅ)二年六月、倭の女王、大夫難升米(なんしょうまい)等を遣して郡に詣(いた)り、天子に詣りて朝献せんことを求む。太守劉夏(りゅうか)、吏(り)を遣し、将(も)つて送りて京都(けいと)に詣らしむ。

其の年十二月、詔書(しょうしゅ)して倭の女王に報じて曰く、親魏倭王(しんぎわおう)卑弥呼に制詔(せいしょう)す。帯方の太守劉夏、使を遣し汝の大夫難升米・次使都市牛利(としぎゅうり)を送り、汝献ずる所の男生口四人・女生口六人・斑布(はんぷ)二匹二丈を奉り以て到る。汝が在る所踰(はる)かに遠きも、乃ち使を遣して貢獻す。是れ汝の忠孝、我れ甚だ汝を哀れむ。今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬(しじゅ)を假(か)し、装封して帯方の太守に付し假授せしむ。汝、其れ種人(しゅじん)を綏撫(すいぶ)し、勉(つと)めて孝順を為せ。汝が来使難升米・牛利、遠きを涉(わた)り、道路に勤劳す。今、難升米を以て率善中郎将(そつぜんちゅうろうしょう)と為し、牛利を率善校尉(こうい)と為し、銀印青綬(せいじゅ)を假し、引見勞賜(いんけんろうし)し遣し還す。今、絳地交竜錦(こうじこうりゅうきん)五匹・絳地縹栗罽(しゅうぞくけい)十張・蒨絳(せんこう)五十匹・紺青(こんしょう)五十匹を以て、汝が献ずる所の貢直(こうちよく)に答ふ。又特に汝に紺地句文錦(こんじくもんきん)三匹・細班華罽(さいはんかけい)五張・白絹(はくけん)五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹(えんたん)各々五十斤を賜ひ、皆装封して難升米・牛利に付す。還り到らば録受(ろくじゅ)し、悉(ことごと)く以て汝が国中の人に示し、国家汝を哀れむを知らしむ可し。故に鄭重(ていちょう)に汝に好物を賜ふなりと。

正始(せいし)元年、太守弓遵(きゅうじゅん)、建中校尉梯儁(けんちゅうこういていしゅん)等を遣し、詔書・印綬を奉じて、倭国に詣(いた)り、倭王に拝仮(はいか)し、并(なら)びに詔を齎(もたら)し、金帛(きんぱく)・錦罽(きんけい)・刀・鏡・采物(さいもつ)を賜ふ。倭王、使に因て上表し、詔恩を答謝す。

其の四年、倭王、復(また)使大夫伊声耆(いせいき)・掖邪狗(えきやく)等八人を遣し生口・倭錦(わきん)・絳青縑(こうせいけん)・縣衣(めんい)・帛布(はくふ)・丹・木(ぼくふ)・短弓矢を上献す。掖邪狗等、率善中郎将の印綬を壹拜(いつはい)す。

其の六年、詔して倭の難升米に黄幢(こうどう)を賜ひ、郡に付して仮授せしむ。

其の八年、太守王頎(おうき)官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼(ひみきゅうこ)と素(もと)より和せず。倭の載斯烏越(さしうえつ)等を遣して郡に詣(いた)り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史張政(さいそうえんしちようせい)等を遣し、因て詔書・黄幢を齎し、難升米に拝仮せしめ、檄(げき)を為(つく)りて之を告諭(こくゆ)す。

卑弥呼以て死す、大いに冢(ちょう)を作る。径百余歩、徇葬(じゅんそう)する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、國中服せず。更々(こもごも)相誅殺(あいちゅうさつ)し、当時千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女(そうじょ)壹与(いよ)年十三なるを立てて王と為し、國中遂(つい)に定まる。政等、檄(げき)を以て壹与に告諭す。壹与、倭の大夫率善中郎将掖邪狗等二十人を遣し、政等の還るを送らしむ。因て台に詣(いた)り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大句珠(せいだいくしゅ)二枚、異文雜錦(いもんざっきん)二十匹を貢す。

【訳・佐伯有清】

参考文献

- ・佐伯有清著；魏志倭人伝の現代語訳（歴史学者）
- ・三浦佑之氏；海の民（日本文学者、千葉大学名誉教授）
- ・大塚初重著；邪馬台国をとらえなおす（考古学者）
- ・杉並良太郎著；邪馬台国 100 問勝負（作家）
- ・ウィキペディア

以上